

視力 0.1 以上でも弱視の私たち

～見える人の仲間にも、見えない人の仲間にも
入りづらい私たちの日常～

第 1 2 回

編集局

しさん

見えることの本当の素晴らしさを教わずに過ごした私
ーこれからでも絵を習いたいと思ってー

1. 自己紹介

私は、1947 年（昭和 22）生まれの 77 歳です。小眼球と先天性白内障で失明状態で生まれましたが、両親が必死で眼科医を探し歩いて、開眼手術は 10 歳ぐらいで行うのが常識だった 70 年以上前に、生まれて 5 ヶ月ぐらいから何回にも分けて濁った水晶体の摘出手術をする眼科医に巡り会い、早くから眼に光が届いたおかげで、小学校入学時には分厚い凸レンズをかけて 0.04 ぐらい見えるように

なっていました。それと、両足の大腿骨が内側に曲がってしまうという原因不明の疾患も持っています。

両親は、私を普通の小学校に入学させようとして公立の小学校を訪ね、そこであっさり断れると、有名な私立の女子校の門もたたきました。が問題にもされず、どうしたら良いのか途方に暮れたようです。その頃は、今のように障害児の修学について検討する機関もなかったのです。私は、たまたま遠い親戚の子が盲学校に通っていることを知り、かろうじて盲学校に入学できました。

2. 障害者手帳の有無 あり

3. 盲学校＝点字教育の時代

「今少し見えている子でも眼を使うと見えなくなるので、なるべく眼を使わない方がよい。将来的には見えなくなる」という風に、その頃の盲学校では考えられていて、入学時に0.1以上見えていても全て点字教育をすることになっていました。点字は勿論人差し指で触って読めるように厳しく指導を受

けました。小学 1 年生の私たちは先生の言うことには素直に従って、私も指先の感覚で点字をすらすらと読めるように鍛えられました。おかげで、大学受験も分量の多い公務員試験の問題も点字で読みこなすスピードがついて、点字は私が情報を得る有力な手段になりました。

実は、私は加齢黄斑変性症になり、10 年ほど前までは矯正視力 0.3 ほどあったのですが、今では 0.1 前後になってきて「失明するのでは」という恐怖を感じることもあります。そんな時、「私には点字がある」「点字で読書したり仕事が続けられる」という思いが私をほっとさせてくれています。情報を得る道具としての点字という文字を獲得できたことについては、あの頃の盲学校での教育方針も私にとっては悪くなかったのかなと思うこともあるのですが。

4. 見えているのに使えない悔しさ・不便さ

私が高校生になった頃、光学機器の進歩に加え、その機器をどのように使えば良く見えるようになる

のかということをご教えるエキスパートと出会って、遠くを見るときは遠用メガネで矯正すると、視力 0.3 ほど出るようになりました。また読書などをするときの近用メガネ（拡大率の大きな弱視レンズなど）を使い、画数の多い漢字なども見分けられるようになり、文字の小さな辞書なども引けるようになりました。

高校 2 年の時に、社会福祉系の大学で学びたいと思うようになり、大学受験の準備を始めました。

1967 年頃、参考書の点訳をボランティアにお願いしても 1 冊できあがるのに 1 年から 2 年もかかる時代でしたし、録音機器はオープンリールの大きなテープレコーダーしかない時代でした。そんな中、受験勉強の参考書などを早く手に入れるために、私でも見えやすかった英語は、比較的早く普通の文字に切り替えて学習するようになりました。他の参考書はボランティアの方に朗読をお願いし、それを録音したテープを聴きながら参考書の文字をたどるといったやり方で漢字の形を覚えていき、漢字仮名混じり文が読めるようになっていきました。でも、これ

は漢字の形を覚えるというだけで、正確に漢字を書くということには繋がりませんでした。漢字が読めるようにはなりましたが、自分で書く事は出来ず、また、自分の専門分野以外の物（小説の自由な表現とか人名の読み方）は、読みこなすこともできませんでした。

ですから、大学受験は点字で受験するしかありませんでした。見えていて（不完全ですが読めて）いるのですが、能動的には書けないので、試験を受けるにも単位を取るためのレポートを出すのにも普通の文字は使えず、とても苦労しました。仕方なく大学側と交渉して、回答は自分で書く事ができる平仮名書きで出す事を認めてもらったりしていました（今のような障害学生支援システムなどない時代でしたから）。

私の通っていた東京教育大学付属盲学校（現筑波大学付属視覚特別支援学校）で弱視教育が始まったのは、1964年、私が中学3年生の時で、私は0.3見えていても点字での教育しか受けていない、少し極端な言い方をすると、全盲と同じように、視

覚以外の感覚から情報を得るという手段を中心とした教育を受けていたことになります。弱視教育が始まる前に盲学校に通っていた 0.1 以上の方達は、つまり、視覚以外の感覚を鍛えることを重視した教育を受けていた人たちは、もう相当に高齢ですから、皆さんも、こういう話を聞くことはないのかもしれませんが。

「0.1 以上でも弱視の私たち」は、晴眼者にも全盲の方達の仲間にも入れず、どこからも理解されにくい存在ですが、その 0.1 以上見えているのに点字での教育しか受けてこなかった私たちのような人たちは、理解していただくことがもっと難しい存在だと感じています。よく言われる言葉は「そんなに见えていて、大学院まで出ているのに、どうして漢字が読み書きできないの？」です。

5. 見ることや見た物に関心を持つ機会が欲しかった

2 浪の末大学に入って、幸いなことに、サークル活動などで親しく話せる晴眼者の仲間ができました。今もそうでしょうが、その頃も大学生の間ではマン

ガの話題がたくさん出ていました。私も、その時初めてマンガに興味を持って、雑誌を買って読んでみました。しかし、1コマに人の表情やいろいろな背景が書いてあり、吹き出しという枠の中に台詞が出てくる読み物は見えているのですが、どういうことを表すのか最初はさっぱり分からず、みんなの仲間に入りたくて、必死になってそのコマが何を表しているのか説明してもらって、ようやく分かってきて、私もマンガの魅力にとりつかれて読むようになりました。

この経験で分かったことですが、盲学校では、表情の変化とか、絵に描いたものの見方とか、図の見方などを教わったことがなかったし、見えていることについて話題にすることが少なかったのです。また、学習の道具としての点字の習得だけではなくて、他の面でも視覚以外の感覚から入ってくる情報を中心にしての話ばかりだったのです。

私は、盲学校入学前までは、塗り絵で遊んだり両親に絵本を読み聞かせてもらったり、平仮名やカタカナを見よう見まねで書いていました。でも、盲学

校入学後は、自然にそういう事はしなくなりました。

勿論写生の時間なんかも無かったです。そのせいかどうか分からないのですが、私は未だに、どうして二次元の紙の上に描いてあるのにコップや家具が立体的に見えるのか分からないし、紙の上に描かれた道がだんだん遠くに離れていくように見える理由が分かりません。確かにそのように見えているのに私がそれを描くことはできません。また、図で物の組み立て方を描いているものの意味が理解できないし、Googleの地図などは拡大すると地図上の建物の名称などは分かるのですが、それと実際の建物などの位置関係とどう繋がっているのかが分からないので、利用できないのです。

6. 私の思い（願い）

「眼を使うと悪くなる」「いずれ病気の進行などで見えなくなる」から、盲学校に入学した児童には、見えていても点字の習得と視覚以外からの情報を使って生きること teaches という 60 年前まで行われていた教育は間違っていました。その教育の中で、

見えているのに、その見えていることを上手く使えない私のような人たちが生み出されたこと、私は、とても悔しいです。

今は、IT 技術のめざましい発達で、点字で書いた文章を漢字仮名混じり文に変換して、論文だって発表できる世の中になっていますから、漢字の書き順など分からなくても普通字の文書での表現ができるようになっていきます。でも、組み立て図の説明を理解したり、二次元の紙に立体的に見える絵がどうしたら描けるのか、等々、見えているのにできないことがいっぱいあります。私は、今からでも、盲学校で教われなかったそういうことを教えてもらえる場所があったら、学んでみたいと切望しています。

中途視覚障害者に点字を教えたり、スマホやパソコンの使い方を指導してくれる所があるように、見えていることを自分で再現したり、体験できる場所があったら、是非学び直してみたいと切望しています。